日本の水族館の未来を考える

－4つの社会的役割のバランスのとれた水族館をめざして －

東北公益文科大学　横沢有紗

□推　薦　　指導教員　呉尚浩

本論文を執筆した横沢有紗さんは、日本の水族館の未来を「レクリエーション」「教育」「調査・研究」「種の保存」の「４つの社会的役割」の視点から考察した。

横沢さんは、もともと大の水族館好きで、論文執筆のために東北はもとより、関東も含めた数多くの水族館を巡り、大変楽しく論文執筆に励んでいたことが印象的である。「好きこそ物の上手なれ」で、同期生の中でも、自主的、意欲的に取り組み、いち早く論文を完成させることがきた。

日本では海外の水族館に比べてレクリエーション的要素が強い。当初、横沢さんは、近年プロジェクションマッピングなどの光や音の演出が細かくなされている水族館が増えていることへの疑問から問題意識が芽生えたが、次第に「４つの社会的役割」全体のバランスの実現に目を向けて、逆にそれを推進するために、ありのままの生き物の良さやおもしろさを活かしたアトラクションを活用するという提言にいたっている。また、加茂水族館や仙台うみの杜水族館の事例から、地域独自の生物の展示をメインにすることや水族館自体のストーリーを紹介していくことの重要性を指摘している。

楽しみではじまった水族館巡りが、大学で学び、研究をすることにより、大変有意義な提言へと結ばれたことは大学教育に関わる者として、うれしい限りである。横沢有紗さんの意欲あふれる姿勢が、人生の中でますます活かされていくように、今後の活躍を期待している。